

## 原著論文

### 養護学校小学部用音楽科教科書の分析

齋藤 一 雄 (上越教育大学)

#### I はじめに

養護学校用音楽科教科書は、1964年に作成され、その後、学習指導要領の改訂に伴い、部分的に改訂されている。

その改訂の基本方針には、「教科書で取り扱う曲は、児童生徒の興味・関心のあるもの、情操を豊かにするもの、情緒の安定を図るもの、身体表現を活発にするもの、自己表現活動ができるもの、創造的な音楽活動ができるもの等から選択する」「養護学校及び特殊学級で多く使用されている曲を取り入れる。また、精神発達の程度の多様な児童生徒が、親しみもてる曲や楽器等を多く扱うようにする」「さし絵は、児童生徒が興味・関心をもち、学習意欲を高める内容と明るい色彩とする」などがあげられている。

1998年の盲学校、聾学校及び養護学校学習指導要領の改訂では、「養護・訓練」が「自立活動」に名称が変更され、「総合的な学習の時間」が新設された。その改訂を受けて、養護学校用音楽科教科書も一部改訂された。

養護学校用音楽科教科書は、小学部用の『おんがく☆』『おんがく☆☆』『おんがく☆☆☆』、中学部用の『音楽☆☆☆☆』の4種である。これらの教科書の特徴は、主に楽曲とさし絵で構成されているところにある。

その編集方針は、「新しい学習指導要領の目標及び内容に即して」「使用頻度の低いもの及びさし絵等の古いものは差し替え」「5%削減する」である。また、中学部用『音楽☆☆☆☆』は、他の教科書と同様のページ数で構成するようになった。

その結果、『おんがく☆』では57曲と「いろいろながっき」、鑑賞曲7曲、『おんがく☆☆』では63曲と「いろいろながっき」、鑑賞曲10曲、『おんがく☆☆☆』では49曲と「おとあてあそび」「たいこであそぼう」「がっきしょうかい」、鑑賞曲10曲、『音楽☆☆☆☆』では56曲と「きいて表現しよう」「地元の民謡を調べてみよう」「つくって表現しよう」「日本の楽器「ふるさとの楽器」「ふるさとの祭り」「世

界の諸民族の音楽」、鑑賞曲16曲から構成された。

齋藤・星名(1996)<sup>1)</sup>は、1995年に出された小学部用『おんがく教科書指導書』(以下、指導書)<sup>2)</sup>にある「教科書掲載教材の分析表」を集計し、調性や拍子、速度、音域、教材選択の観点や教材選択の基準が『おんがく☆』～『おんがく☆☆☆』にかけて変化していることは、子どもたちの認識や音楽の発達段階を配慮したものであることを示している。

しかし、実際には、知的障害養護学校においては、養護学校用音楽科教科書の存在について知られていない、活用されていない現状が見られるという(齋藤、1996)<sup>3)</sup>。

そこで、2002年に出された『おんがく☆ おんがく☆☆ おんがく☆☆☆教科書解説』(以下、解説書)<sup>4)</sup>にある「教科書掲載教材の分析表」を比較しつつ、養護学校用音楽科教科書の内容について検討し、教科書の教材について、有効に活用できる方向性を探ることにした。

#### II 目的

養護学校小学部用音楽科教科書の掲載教材の分析をとおして、『おんがく☆』～『おんがく☆☆☆』の教科書の段階的な発展性や有効な活用の方向性を探る。

#### III 方法

教科書解説書には、調性、拍子、速度、音域、教材選択の観点や視点が「教科書掲載教材の分析表」として掲載されている。それらに加えて、小節数、リズムパターンの種類という観点から教材の特性について分析を試みる。

#### IV 結果と考察

##### 1 教材選択の観点と教材選択の視点について

養護学校学習指導要領における教科「音楽」の内容は、小学部の1段階は「音楽遊び」、2段階及び3段階は「鑑賞」「身体表現」「器楽」「歌唱」という観

点で示されている。解説書には、養護学校用音楽科教科書に掲載された楽曲について、教材選択の4つの観点並びに教材選択の視点が示されている。

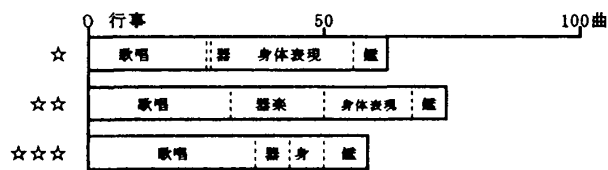


図1 各教科書の教材選択の観点別の曲数

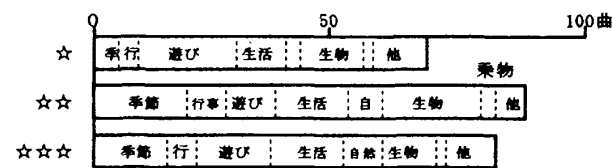


図2 各教科書の教材選択の視点別の曲数（重複あり）

まず、教材選択の観点について、教科書別に曲数をみると、図1から歌唱教材の曲が『おんがく☆☆☆』から『おんがく☆☆☆』の順に多くなっていることがわかる。逆に、身体表現の教材の曲が少なくなっている。器楽の教材の曲は、『おんがく☆☆』で多い。鑑賞教材の曲は、各教科書ともほぼ同様な曲数になっている。

これらの傾向から、子どもたちの音楽表現の発達を考え、音楽遊びや身体表現の活動が多い段階から、器楽表現への分化を図りつつ、歌唱表現へと発展させるという教科書の構成の意図が読みとれる。

次に、教材選択の視点について、教科書別に曲数をみると（図2）、『おんがく☆☆』では遊びを視点とした曲が多いことがわかる。『おんがく☆☆』では、遊びを視点とした曲が少なくなり、季節・生活・生物を視点とした曲が多くなっている。『おんがく☆☆☆☆』では、季節・遊び・生活を視点とした曲が多いが、行事・自然・生物その他とバランスのとれた構成になっている。

子どもたちにとって身近な遊び・季節・生活・生物の視点から、行事や自然などの視点へと広がっていく教科書の構成の仕方が考えられる。

## 2 拍子について

拍子については（図3）、小学部用全体をとおして2/4拍子の曲と4/4拍子の曲の割合が大部分を占め、2/4拍子の曲の割合は『おんがく☆☆』から『おんがく☆☆☆☆』へと少なくなり、逆に、4/4拍子の曲の

割合は『おんがく☆☆』から『おんがく☆☆☆☆』へと多くなっている。3拍子の曲は全体に少なかった。

この傾向は、曲の構成もわかりやすく、リズムも単純な曲が多い2/4拍子の曲から、曲の構成もリズムもやや複雑な曲が多い4/4拍子の曲へと、子どもたちの理解や表現の発達にそって選曲した結果ではないかと考える。

## 3 速度（テンポ）について

テンポについては（図4）、『おんがく☆☆』において100～119のテンポの曲が多くあり、『おんがく☆☆☆☆』から『おんがく☆☆☆☆』では、100～119のテンポの曲が少なくなっている。また、80～99のテンポや120以上のテンポの曲は、各教科書とも同様な割合になっている。

『おんがく☆☆☆☆』では、その他の割合が多くなっているが、その内容は、速度記号やことばでテンポが表示されているというものである。

全般的にみると、遅い曲の割合が『おんがく☆☆』から『おんがく☆☆☆☆』にかけて、少なくなる傾向にある。

このことは、子どもたちの表現力や身体能力が高まると、幅広いテンポに応ずることができるようになるということの表れと考えることができる。

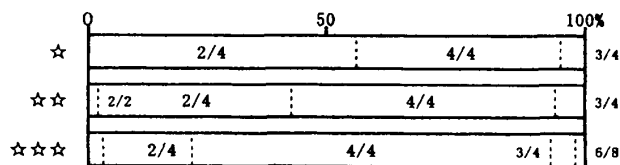


図3 各教科書の拍子別の曲数の割合

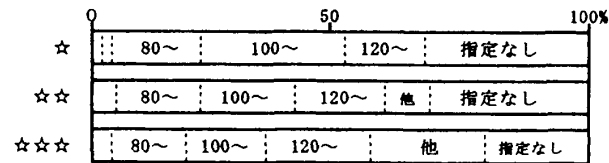


図4 各教科書の速度別の曲数の割合

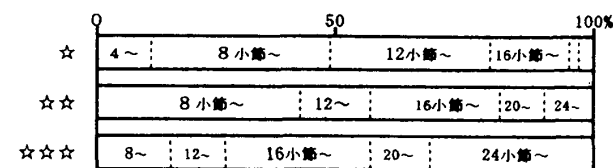


図5 各教科書の小節数別の曲数の割合

表1 各教科書の奇数の小節数の曲数

小節数	5	7	9	11	13	17	23	31	33	37	45	計
☆	1	2		1								4曲
☆☆			2	1		1			1	1		6曲
☆☆☆				1	2	2	1	2			1	9曲
計	1	2	2	3	2	3	1	2	1	1	1	19曲

4 小節数について

小節数については、各教科書の楽譜から小節数を集計し、教科書ごとにその割合を示した(図5)。

『おんがく☆』では8小節から14小節の短い曲の割合が67%、『おんがく☆☆』では57%、『おんがく☆☆☆』では25%と少なくなっている。逆に、16小節以上の曲については、『おんがく☆』では21%、『おんがく☆☆』では43%、『おんがく☆☆☆』では75%と、長い曲の割合が多くなる傾向であった。

また、教科書全体の小節数についてみると、ほとんどが偶数の小節数の曲であったが、奇数の小節数の曲も表1にあるように、19曲と少ないがあった。

全体として、『おんがく☆』から『おんがく☆☆☆』へと、段階的に配列されていると考えられる。

5 リズムパターンについて

リズムパターンについては、各曲の楽譜から1フレーズを1つのリズムパターンと考えて、リズムパターンの長さを小節数によってとらえ(図6)、リズムパターンの種類についてはその数を集計して、その割合を教科書別に示した(図7)。

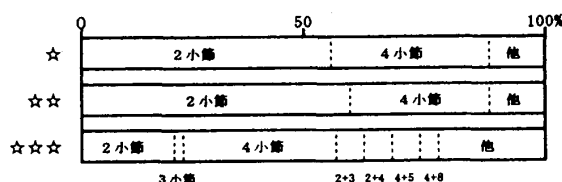


図6 各教科書のリズムパターンの小節数別の曲数

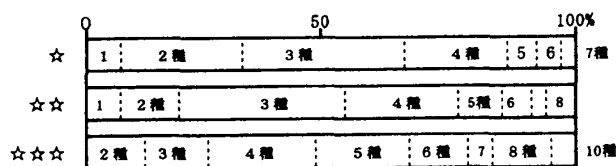


図7 各教科書のリズムパターンの種類数別の曲数の割合

その結果、リズムパターンについては、『おんがく☆』と『おんがく☆☆』で2小節と4小節のリズムパターンが82%をしめ、『おんがく☆☆☆』では55%であった。

その他の曲は、1小節、3小節、5小節、8小節で

構成されたリズムパターンが含まれる曲である。

『おんがく☆☆』の曲で例をあげると、1小節については「きみがよ」の「こけの」の部分、3小節は「はんかちのうた」の「しかくにたたんだしわなしはんかちカチカチカチ」の部分、5小節は「ぼうが いっぱんあったとさ」の「あつというまにかわいい コックさん」の部分、8小節は「かめのえんそく」の「かめの遠足は3日前からリュックサックにおかしをつめる」の部分である。『おんがく☆☆☆』では、2小節+1小節+4小節+5小節のリズムパターンの構成の曲「あんたがたどこさ」などもみられた。しかし、全体的に短くて簡潔なものが多いことがわかる。

リズムパターンの種類も、1種・2種・3種で半数以上を占め、4種までの曲で80%を占める。また、多種のリズムパターンの曲でも、パターンの構成はほとんど似たようなもので、一部分だけ異なる部分があるので、多種なリズムパターンとして集計せざるを得ない曲が多い。

6 「かめのえんそく」と「はんかちのうた」について

『おんがく☆☆』の曲の中で、新しい感覚の曲で、しかも、子どもたちの興味・関心や生活に関連した曲として「かめのえんそく」(新沢としひこ作詞・中川ひろたか作曲)、身近生活との関連で「はんかちのうた」(まど・みちお作詞・中田喜直作曲)が今回の改訂で採用された。

2曲とも、33小節と9小節から成る曲で、構成やおさまりという点では、居心地の悪さを感じる面もあるだろう。また、長くてプレスしにくいフレーズや付点のリズムが続くという面もある。

子どもたちの表現能力を考えると、むずかしい部分もあるが、身体による表現活動や楽器による創造的な音楽活動という点、学校生活との結びつきという点などから、学校行事の事前学習や毎日の日常生活学習などでも、有効に活用できる教材だと考える。

以下、それぞれの曲について分析する。

- (1) 「かめのえんそく」ハ長調、3/4拍子、速度表示なし、音域C~C、33小節、教材選択の観点(歌唱・器楽)、教材選択の視点(行事・生物)

曲は、弱起で、付点のリズムから始まり、四分音符、四分休符と続く(1小節)。その後は、四分音符

が16拍続き、付点のリズムが3拍、四分音符、四分休符とあって長いフレーズが終わる(7小節)。このフレーズが2回繰り返される。曲の後半は、1小節休んで、付点のリズムと2分音符、四分音符で構成された2小節の特徴的なフレーズが繰り返される(17小節)。前半は、長いフレーズ(1+7=8小節)で、息継ぎの場所もみつからない。

逆に、後半は短くおぼえやすいフレーズが繰り返される。歌詞は、カメが遠足に出かけるときの様子が、空想の世界の中で描かれている。遠足の行事と結びつけて指導することも考えられるが、曲の不思議な感覚や歌詞のおもしろさを表現する楽しい曲として活用できる。

(2)「はんかちのうた」=長調、4/4拍子、速度表示なし、音域H~D、9小節、教材選択の観点(歌唱・身体表現)、教材選択の視点(生活)

曲は、付点のリズムの音符が全部で20拍連続し、八分休符や16分休符、八分休符と四分休符の組み合わせのお休みがあったり、「しかくにたたんだしわなしはんかちカチカチカチ」の部分は3小節あり、他の部分は2小節のフレーズで構成されていたりと、楽譜をみると非常に複雑のようにみえる。

歌詞は、身近なハンカチを歌ったもので、カチカチやコツコツなどの擬音の部分もある。日常生活と結びつけたり、ハンカチを意識化したりするために活用できる曲である。

## V 養護学校用教科書の有効な活用の方向性

養護学校小学部用音楽科教科書の掲載教材の分析をとおして、『おんがく☆』～『おんがく☆☆☆』の教科書の段階的な発展性や有効な活用の方向性を探ってみた。その結果、『おんがく☆』～『おんがく☆☆☆』の教科書に掲載された曲の特性を比較することによって、子どもの発達段階にみあった配列がなされ、段階的に発展していることをとらえることができた。

また、解説書にある「教科書掲載教材の分析表」にはない、小節数やリズムパターンの種類という観点を加えて分析した。その結果、奇数の小節数の曲が少ないこと、2～4小節のリズムパターンに混じって1小節や3小節、8小節などのリズムパターンが含まれた曲があることに気づかされた。

これらの結果から、各教科書に掲載された教材は、子どもたちの発達段階にそっていることとともに、「かめのえんそく」「はんかちのうた」など新たに掲載された曲には、子どもたちの生活や学校行事に関連した内容を持ち、興味をひきおこすリズムがあり、教科書活用の活用を広げるものになっていると考えることができる。

養護学校の「音楽」の授業以外にも、「朝の会」「帰りの会」などの日常生活学習、行事に向けた生活単元学習など、幅広く活用できるものであることが示唆された。

今回は、教材の要素に視点をおいた分析を試みたが、さらに教材の持つ文化性や芸術性などの観点からの検討、教材を実際実践化してみたの検討、多様な集団を対象にした授業での生かし方等の検討によって、養護学校用音楽科教科書がさらに活用されるようになると考える。

本稿は、日本学校音楽教育実践学会第7回全国大会での口頭発表「養護学校用音楽教科書の教材分析」に加筆・修正したものである。

## 注

- 1) 齋藤一雄・星名信昭(1996)「養護学校小学部用音楽科教科書の教材分析」, 上越教育大学障害児教育実践センター紀要, 第2巻, pp. 26-36
- 2) 文部省(1998)『盲学校、聾学校及び養護学校学習指導要領』文部省印刷局
- 3) 齋藤加代子(1996)「精神薄弱養護学校『音楽』教科書使用の現状と課題」, 埼玉県立南教育センター紀要, vol. 9, pp. 60-63
- 4) 文部科学省(2002)『おんがく☆ おんがく☆☆ おんがく☆☆☆教科書解説』東京書籍

## 参考文献

- 文部省(1995)『おんがく教科書指導書』東京書籍  
 文部省(1999)『盲学校、聾学校及び養護学校学習指導要領(平成11年3月)解説一各教科, 道徳及び特別活動編一』東洋館出版社  
 齋藤一雄・齋藤加代子(1997)『障害児のための音楽・リズム』明治図書  
 齋藤一雄(2002)「教科書からみる障害児の音楽教育の現状」, 日本学校音楽教育実践学会編『障害児の音楽表現を育てる』音楽之友社, pp. 12-16

## An Analysis of Music Textbooks in Schools for the Mentally Retarded

Kazuo SAITO

Joetsu University of Education

New music textbooks used in schools for the mentally retarded were published from the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology in 2001. There are three textbooks for elementary department, titled music ☆, music ☆☆ and music ☆☆☆. There are 169 pieces of music in the three textbooks. They were classified into four fields of singing, body movement, instrumental music, and listening, and analyzed from the viewpoints of the theme of music, meter, tempo, number of bars, and kind of rhythmic patterns.

Results are as follows: In regard of percentage for four fields, singing increases from music ☆ to music ☆☆☆, while body movement decreases from music ☆ to music ☆☆☆. In comparison of three textbooks, the upper grade has more variety of tempo, number of bars, kind of rhythmic patterns.

The results correspond well to the children's musical development. The analysis shows that the textbooks are well edited and useful.